

# 現代日本語における「人」と「人間」の 用法の基礎的分析（三）

西 本 恵 司

（受付 1998 年 5 月 20 日）

## Contents

### Part 3. An analysis of the usage of 'hito'

§. 1 On the possibility of replacing 'hokanohito' with 'tanin' or 'hito'

§. 2 On the possibility of replacing 'tanin' with 'hokanohito' or 'hito'

§. 3 On the possibility of replacing 'hito' with 'tanin' or 'hokanohito'

### Conclusion

## はじめに

本論の課題は、引き続いて、「人」の意味と用法を究明することである。

これまで、「人」の意味と用法については、次のような仕方に取り上げ論じてきた。即ち、具体的な場面、現場において、知覚されている対象に対して、「人」が使われる場合（これを〔1〕とする）。次に、具体的に知覚されている具体的な場面や現場から離れて用いられる場合で、それには三つの場合が考えられた。まず、個別具体的な対象を指示する場合（〔2〕）。次に、ある種類に該当するものとして対象を指示する場合（〔3〕）。そして、一般的に述べる場合（〔4〕）、である。このうち〔2〕と〔3〕では、これまで、修飾語句をとまって用いられる「人」の用例について検討してきた。

さて、本論で扱おうとする「人」の用法は、〔2〕と〔3〕のように修飾語句をとまって用いられるのではなく、単独に用いられ、しかもその意味がいくつかの辞書で「自分以外の人間。他人」<sup>1)</sup>あるいは「ホカノヒト。他人」<sup>2)</sup>とされている、そのような意味に該当する「人」の用法である。

1) 『学研国語大辞典第二版』（金田一春彦，池田弥三郎編，学習研究社 昭和63年）

2) 『新編大言海』（大槻文彦著，富山房 昭和57年）

例文をあげてみよう。

1. 「あとの家族たちはどうするんだ」

「だって、こんな場合人のことなんか考えていられないじゃないの」  
(流れる星)

2. 「……，そうしたら光照がちょっと人に会ってくるってロッジを出て行ったの。……」 (青の)

3. 「そうだったの……。でもね，先生たち，そんなんじゃないの。だから，人に言ったりしないでね」 (かわいい)

さて，これらの例文の「人」は先にあげた〔1〕から〔4〕の用法のうちの〔1〕と〔4〕には該当しないことをまず確認しておきたい。では，〔2〕と〔3〕についてはどうであろうか。これについては，ここで検討しようとしている用法にとって，〔2〕と〔3〕のような分類の仕方が適当であるか，という問題がある。そこで，本論では，〔2〕と〔3〕という仕方とは違う分析の視点から，これらの用法の分析を行ないたい，と考えている。

ところで，例文にあげたような「人」の用法については，通常，「他人」を意味すると考えられている。例えば，鈴木孝夫氏は「ひとということばは，人間を総称的に把握する用法を除けば，すべて自分ではない他人，他者という共通の意味を持つことばである。」<sup>3)</sup>と述べ，そのような意味から「人」の用法を解釈しようとしている。

例文1の「人のこと」は「他人のこと」あるいは「他の人のこと」と言い換えることができるし，例文3は「他の人」とも「他人」とも言い換えられると思われる。では，例文2についてはどうであろうか。

例文2について言えば，確かに，この例文の「人」は意味としては「他

---

3) 鈴木孝夫「自称詞としての『ひと』」(『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』第8号，1976年) p. 56。

「人」が自称詞として用いられる語法を解釈するにあたって，鈴木氏は，「人」ということばの意味に基づいて，その語法を解釈しようとしている，と言えよう。

人」であるが、しかしそれで言い換えることはできない。

本論で扱おうとする「人」の用例には、例文1, 3のように、意味においても用法においても、問題なく「他人」ないし「他の人」と言い換えることができると思われる用例は、確かに多い。しかし、一方で意味の上では「他」（本人あるいは当人以外）である人物を意味してはいても、「他人」ないし「他の人」と言い換えることのできない、あるいはそれが不自然と感じられる用例もまた多い。

本論では、そのことばの意味によって、そのことばの用法を規定するという方法はとらない。そうではなく、「他の人」「他人」「人」の三つのことばの用法を、三つのことばの相互関係（言い換えが可能か否か）<sup>4)</sup>によって、分析するという方法をとる。それによって、それぞれのことばの用法を浮き上がらせ、解明することが、本論の課題である。

ことばの使用は、我々のことばの用法の理解をはるかに凌いでいる。実際にどのように使われているのか、ということの分析から、用法に迫ろうというのである。

なお、本論には、多くの用例の引用があるが、そのうち新聞・雑誌からの引用を除く、新規の略記と出典は以下の通りである。（それ以外は、前々稿<sup>5)</sup>の「はじめに」に記してある。）

（漱石） 「漱石『虞美人草』殺人事件」 斎藤栄著 中公文庫

（流れる星） 「流れる星は生きている」 藤原てい著 中公文庫

（シナプス） 「シナプスの入江」 清水義範著 福武文庫

（かわいい） 「かわいい目撃者」 佐野洋著 集英社文庫

（パステル） 「焦茶色のパステル」 岡嶋二人著 講談社文庫

（鎌倉） 「鎌倉<sup>たきぎのう</sup>薪能殺人事件」 斎藤栄著 光文社文庫

4) 言い換えが可能かどうかの判定は、ひとそれぞれに許容範囲に程度の差が考えられる。本稿での判定についても、異論が予想される。

5) 拙稿「現代日本語における『人』と『人間』の用法の基礎的分析（一）」（広島修大論集 第37巻第2号）参照。

### 第三部

#### [1] 「ほか（他）の人」の用法と意味の分析

##### 1. 「ほか（他）の人」の用法の分類

「ほか（他）の人」というのは、まず基本的に、「ほか」ということばで私（自分）以外の人を指しているのので、自他の区別と、そして区別された自他があい対する、そのような視点がある。そのような視点のもとに、ほか（他）の人の意味・用法としては、次の三つが考えられる。

まず、あるグループを想定するのが自然な場合。この場合グループとしては職場などのような「私（自分）」が帰属意識をもっている既存の組織とか、友人、仲間などのような、「私（自分）」がその範囲をある程度限ることのできる“まとまり”などが考えられる。

次に、「私（自分）」がいる具体的な場所に、偶然居合わせることになった（あるいは、偶然ともにいる）人たち、を意味する用法。

第三に、当事者以外の、別の人を意味している場合。

以下に、それぞれ例をあげよう。

##### 1-1. あるグループを想定するのが自然な場合。

###### 1. そして、日美子は小山田美津江に言った。

彼女もまた、すぐ、

「他的人是？」

と聞いた。

「他的人是、二人ともいやなんですって。自分たちは何もしてないし、行く必要もないからってということなの。あなたは どうする」(漱石)

###### 2. 私達公務員も皆さんと同様に、日々の仕事をこなすのに忙しいうえ、休んだら他の人にしわ寄せがいくという心配から、休みがなかなか

取れません。（朝日新聞，声，97.1.29）

3. ほとんど団の他の人と話をしない。（流れる星）
4. おそろしい延吉熱（発疹チフス）が他の人たちに伝染するのを防ぐためであった。（流れる星）
5. 「あの、ほんとうにぼく、草薙先生とか、他の先生に、失礼なことをしていないでしょうか」（シナプス）
6. ことに羽木章子の声は、こどもに似合わず、ハスキーなところがあって他の女の子と間違えようがなかったのだ。（かわいい）
7. 「おれは、まだ建物の中にいるんじゃないかという気がする」  
「まあ、それは他の奴に任せるさ。とにかく、この辺りで見張っていると言われたんだ。……」（パステル）
8. 「……。今、奥さんを見て思い出しました。ここに無いので、誰か他の者が気を利かせて渡してくれたのかとも思ったんですが……」（パステル）

1-2. 偶然居合わせることになった人たち。

1. ほかの人間はと見ると、これは兩人よりも早く、皆が虚脱状態になっていた。（彩り河，下）
2. しばらくして、突然中年のおばさんに怒鳴られました。「あんたたち、荷物ひざの上に置きなさい。他の人が座れないじゃないの!!」こんなに言われたことがなかったので、びっくりしました。（朝日新聞，声，97.1.18）
3. それから私は考えました。ゆとりとは、他の人のことを考え、譲り合う心。たくさんではなくても、できるだけ人に親切にふるまうこと。それが豊かな社会をつくるための一歩になると思います。（同上）
4. 子ども達には周りが見えていないのである。……。無理もないと思ったが「自分たちだけが乗っているんじゃないよ。他の人の迷惑になるからやめなさい」としかった。（中国新聞，広場，97.11.9）

5. ベビーカーを押しての買い物は、やはり気がひけるので、なるべく開店してすぐの空いている時間帯に行くように心がけている。私なりに他の人に迷惑をかけないように、ベビーカーを使おうと思っているのだが、自分がこういう立場になって初めて、街がどんなに歩きにくいかにいうことに気づかされた。(朝日新聞, 声, 97.4.3)
6. 昼食が終ったところで、ようやく坂出がおずおずと近寄ってきて、他の教師にはきこえないような小声で言った。(シナプス)
7. 三軒目のバーで、誰かとやけに熱心に議論したような気がするのである。相手は、同僚の教師ではなかったと思う。だとすれば、同じ店にたまたまいた他の客だということかもしれないが、なぜそんな見知らぬ人間と議論をしたのか皆目わからない。(シナプス)

1-3. 当事者以外の、別の人。

1. 「あの人がわたしの財産に関心を持っていたとお考えになるのなら、それは間違いです。ほかの人と結婚する気だったんですから」と栄子はいった。(雌花)
2. 「そんなことないわ。あの人、殺されるのあたりまえかもしれないわ。姉さんだけじゃないわ、ほかの人にも、いろいろ悲しい思いをさせていたんですもの。当然の報いだといえないことないわ」(雌花)
3. 「あなたが見たのが、御主人でなかったのは、たしかなんです、誰かほかの人と間違えたんじゃないですか」(雌花)
4. 「たしかに、写真はほかの人のものだったかもしれないわよ。でも、そのあと、あなたが、ずっと手紙を書いているわけでしょう?……」(かわいい)
5. いやあ、二人のやりとりのおかしいこと、女性のための就職情報誌「サリダ」のこのCMが、ぼくはすっかり気に入ってしまった。そう、ほかの人に言われるのならともかく、「あんたには言われたくない」ということが、人それぞれに、けっこうあるんじゃないだろ

うか。（朝日新聞，天気図，97.2.24）

6. ゆとりとは、何だろうか。そう考えさせられた大きな出来事がありました。でも、それは他の人から見れば小さなことかもしれないけど……。 （朝日新聞，声，97.1.18）
7. 「まさか、ぼくが個人的秘密——それは同時に、他の人間の秘密に関することかもしれないのです——を守ったために、ぼくを逮捕なさろうとおっしゃるんじゃないでしょうね」（新オリ）

2. さて、以上の分類のそれぞれについて、その用法と意味を検討しよう。

2-1. 1-1. に例示した各文は、発話者あるいは書き手においてある“人のまとまり”が想定されている。その“人のまとまり”をグループとも集合とも言うことができようが、そのまとまりにはいくつかの特徴がある。まず、そのまとまりは持続的であること。そして、それ以外の人達と区別される、そのまとまりを特徴づけるある特定の関係があることである。その場限りで一時的ではない、持続的なある人間関係を有する“人のまとまり”が想定、あるいは前提された状況で用いられている。

例文1は最も典型的な用法である。この例文では、お互い同窓で旧知の仲の三人の女性がたまたまある事件にかかわり、それに関連して警察へ行くかどうかについて、三人がそれぞれ各人の対応を気にしていることを、述べている。この例文がよく示しているように、「ほかの人」の「ほか」というのは、ただ「わたし以外」ということではなく、その都度、特定の広がり構成をもつ人間関係（特定のある集合、そういう意味でグループ）があり、その中の「わたし以外」ということである。

例文2は、同じ職場の人達が想定されているし、例文3，4でも、特定の集団・グループが想定されている。そのうち例文3は、発話者が所属する集団であるし、例文4は、いくつかのそうした集団からなる、発話者の周囲にいる引き揚げ者の一群である。また例文5～8の各文は、「人」を用いた例文ではないが、発話者を含む、同じ職場で同じ仕事に携わる人達が

前提されている。

2-2. 1-2. に例示した各文が1-1. の各文と異なるのは、偶然に居合わせた人達であることである。そしてその人達にあるまとまりを与えるものは、バスの中や電車の中(例2, 3, 4)とか、ある部屋の中(例文1, 6)とか、店の中(例文7)などの、その場を限っているものである。例文5はそれらの各文に比べると、明確な区切りがあるわけではないが、それでも“ベビーカーを使う私”のまわり<sub>に</sub>にたまたま居合わす人たち、ということは了解できる。

2-3. 1-3. に例示した各文は、“話題になっている人”以外の人を表している。話題になっているのは、話し手自身(あるいは、書き手)か話相手(あるいは、読み手)かそれとも話題の第三者かである。1-3. の各例文について言えば、話し手以外の人を意味するのは、例文1, 3, 6, 7, 8であり、話相手以外の人を意味するのは、例文4, 5であり、話題の第三者を意味するのは、例文2, 9である。

ところで、「～以外の人」という規定の仕方は、ただ関係を示しているだけではなく、そのような関係にある人の存在をも含意している。1-3. にあげた用例について見ると、例文1, 2, 3, 9に関しては、話し手もしくは書き手は、それに相当する具体的で個別的な人物を思い描いている(念頭においている)、あるいは思い描くことができる、と言えるのではないか。それに対して、例文4, 5, 6, 7, 8は具体的に誰かは問題ではなく、ただ「～以外」という関係にあることが強調されていて、それに相当する個別具体的な人物については特段に問題ではない、と言えよう。

3. さて、以上のような「ほかの人」ということばの用法と意味の分析を手がかりに、「他人(たにん)」そして「人(ひと)」ということばの用法について、それぞれの特徴を考えたい。そしてそれを、1. に掲げた各例文



について、それらがどれだけ「他人」や「人」に置き換えられるかを検討することで、探ってみよう。

3-1. 1-1.に例示した各文は、例文2, 7を除いて、「他人」および「人」と言い換えることはできない。その理由は、発話者を含む特定の間関係にある特定の集団が発話者に強く意識されているからである。言い換えれば、「ほかの人」が指示する人物が、発話者にとって具体的に明瞭に意識されているからである。そして、その人物と発話者との関係を言い立てることが必要であればあるだけそれだけ「他人」および「人」と言い換えにくいと言える。

例文2, 7も発話者が同じ職場の同僚(2)や同じ任務に携わっている者(7)を強く意識している発言になっている。しかし、このような人間関係はどちらかと言えば、偶然で機械的であるから、仲間（同僚）関係を取り立てて言う必要を感じなければ、それだけ「人」あるいは「他人」に言い換えられる率も高くなる。例文2は「他人」よりもむしろ「人」と言い換えられなくもない。例文7は「他人」に言い換えるのは無理としても「人」に言い換えることは可能である。

ただし、そうすると「仲間（同僚）関係（意識）」は欠落して、「私（発話者）以外の人」という意味だけになる。ただ例文2にしても例文7にしても、「私（発話者）以外の人」の存在が発話者において明瞭に意識されていて、これは次の3-2.で1-2.について検討するときにも出てくることだが、「周りの」人間という視点をそなえているので、その場合には、「他人」と言い換えるのは無理だと感じさせるが、「人」となら言い換えできると感じさせる<sup>6)</sup>。

---

6) 言い換え可能と考えることと、実際にそのような用例があるか、ということとは一応別のことと考える。この例において、もし「人」と言い換えられてい場合があるとすれば、それは3-2.で言う「居合わせる」という観点で使われている、と考えられる。

例文8は、例文2, 7と違って、私（発話者）以外の「私（発話者）と同じ職場の者」という意味を落とすわけにはいかないそのような例文である。このような場合には、「人」や「他人」と言い換えることはできない。

3-2. 1-2. に掲げた各例文についてはどうであろうか。これらの各文は「偶然居合わせる」ことが共通の指標であるが、そのような現場でのこととして語られている例、例えば、例文1, 2, 4, 6（これらをAグループとする）と、そのような現場を一応離れながら、しかしそのような現場を念頭に置きつつ語られている例、例えば、例文3, 5, 7（これをBグループとする）とに分けて考えることができよう。

例文1, 2, 4, 6に関して言えば、これらの中では例文6が、「居合わせている」ことの意味を小さく見積ることができるので、「人」とも「他人」とも言い換えることができそうである。しかし、例文1は言い換えはできない。例文2も「他の人」が最も自然であるが、「人」を使うこともありうる。

偶然居合わせている現場で発話される場合は、「居合わせている」関係に比重を置いた発話になっているほど、「他人」との言い換えはできないと言える。

例文3, 5, 7に関してはどうであろうか。例文3で「他の人」と「人」の両方が現われていることは、きわめて示唆に富んでいると言えよう。例文3は例文2の具体的で個別的な状況を念頭に置いて語られているのであり、そのような文において、「他の人」が自然に「人」で受けられていることに留意したい。つまり、個別的な状況が念頭にある場合には、「人」に言い換えることができると言えよう。同様に、例文5も具体的な状況を念頭に置いて語られていると考えられるので、この例文の「他の人」を「人」に換えることはできる。このことは例文7についても言えよう。

では、例文3, 5, 7に関して、「他人」で言い換えることについてはどうであろうか。例文7については不自然であるが、例文3, 5に関しては、「他

人」での言い換えは可能である。つまり、例文3, 5に関しては、「人」とも「他人」とも言い換えることが可能である。

これらの例文で語られる「他の人」や「人」は、いわば「周りの人」であり、しかもそのような人達について直接現場で語るのではない場合には、「人」とも「他人」とも言い換えが可能である。そして、その違いを明確に表現することは困難ではあるが、強いてその違いを言い表わせば、「人」の場合はなお個別的で具体的な状況の近くにあり、「他人」の場合は自他の対比がより出てきており、より一般的になる、と言えるだろう。

3-3. 1-3.の各文については、どうであろうか。これらの用例は二分することができる。例文1, 2（これをCグループとする）と、それ以外（これをDグループとする）である。

例文1, 2の「ほかの人」は話し手以外の人物で、しかもその人物について話し手は具体的に知っている、と考えられる。そのような場合には、「人」とも「他人」とも言い換えができない。

それ以外の例文に関して言えば、特定の個別具体的な人物が特に考えられているわけではないので、「他人」とも「人」とも言い換え可能である。

しかし、これらの例文は「人」に言い換えられないことはないとしても、「～以外の者」の「以外」に力点があるから、しっくりしない感じを残す（例えば、例文5, 6, 7）（これをEグループとする）。例文3について言えば、話題になっている「御主人」以外の誰か別の人という意味で、はっきりと「ほか」に力点があるので「人」と言い換えることはできない。

4. 「ほかの人」の用法を大きく三つに分類した上で、「ほかの人」の意味と用法を媒介に「人」と「他人」ということばの用法と意味を見定めようとしてきた。そのまとめをしておこう。

4-1. 「ほかの人」は、仲間やある特定のグループの構成員を指示するの

に用いる (1-1.) けれども、「人」や「他人」はそのような仕方で用いることはできない。また、「ほかの人」は偶然居合わせた人達にも用いられる (1-2.) が、その現場が念頭にある場合には、「人」が使われ、その現場から離れてその現場を話題にする時「人」や「他人」が使われる。また、「ほかの人」が「(それ) 以外の人」の意味で用いられる場合 (1-3.), 個別具体的な対象がある場合には「人」や「他人」は使われにくいだが、そのような特定の人がない場合は「人」とも「他人」とも言い換えられるが、ただ「～以外」というところに力点がある場合には、「人」は使われにくく「他人」が使われる。

4-2. 以上のことは次のようにまとめることができる。

- ①仲間の誰かや特定のグループの構成員 (1-1.) また個別具体的な対象がある場合 (1-3.) (Cグループ) には、「他の人」だけが用いられる。
- ②現場において直接居合わせ人を指示する場合 (1-2.) (Aグループ) には、「他の人」と「人」が用いられる。
- ③居合わせ現場から離れ、その現場が話題にされる場合 (1-2.) (Bグループ) また一般的に他者として語られる場合 (1-3.) (Dグループ) には、「他の人」も「他人」も「人」も用いられる。

このように「他の人」の用法を媒介にすると、“偶然に居合わせ人”あるいは“まわりの人”に対する「人」と「他人」の用法の違いが、少し明らかになる。つまり、「他人」は自他の対比において、その現場を話題にする時現われるが、「人」はその現場においても、そこから離れて話題にする場合にも用いられる、ということである。

勿論、この点は、違いの一端であり、引き続き「他人」「人」の順に、そのことばを中心にしながら、他のことばとの関連を分析していこう。

## 〔2〕「他人」ということばの意味と用法

1. 「他人」ということばの意味をいくつかの辞書にあたってみれば、次のようである。例えば、『大言海』<sup>7)</sup>では、三つの意味があげられている。

即ち、「(一) ホカノヒト。我レナラヌ人。(二) 血縁（チスヂ）無キ人。(三) 見ズ知ラズノ人。関係ナキ人。路傍人。」である。この（三）の項目を独立した二つの項目——例えば、③見ず知らずの人。親しくない人。④その事と関係のない人。当事者でない人。——としている辞書もある<sup>8)</sup>。

さて、このような意味の分類では、「他人」と「人」や「他の人」といったことばとの関係は見えてこない。辛うじて、（一）の項目が、「他の人」との関連を示唆している——そして、おおくの辞書が、第一の項目に、「自分以外の人」という項目を立て、同時に「他の人」あるいは「他者」と列記している<sup>9)</sup>——が、では、これはどのようなことを意味しているのか。「自分以外の人」を意味する「他人」は「他の人」と言い換えられるということなのか、「自分以外の人」を意味して「他の人」と言い換えられる、そのような用法が「他人」ということばにはあるということなのか——普通には、このように理解されている——。

しかし、では、（二）や（三）（あるいは、③、④）の項目と「他の人」との関係はどうなのか。また、項目相互の用法上の違いといったものはあるのかないのか。特に③、④の違いはどこにあるのか。このような問題に答える手がかりはこれらの項目自体にはない。

このような問題に答えるためには、「人」や「他の人」との言い換えを検討するに越したことはない。この節では「人」と「他の人」との言い換えの様相によって、「他人」ということばの用法と意味の分類を試みる。そして、それをもとに、「人」と「他人」ということばの関係を分析することが

---

7) 注2)を参照。

8) 『大辞林第二版』（三省堂）、『日本語大辞典第二版カラー版』（講談社）など。

9) 注7) 8) の各辞典や、『国語大辞典』（小学館）など。

この節の課題である。

2. 「他人」ということばの意味と用法を次の方法で四分類する。

1. 「他の人」との言い換えが可能であり、しかも「人」との言い換えが可能なもの。
2. 「他の人」との言い換えが可能であるが、しかし「人」との言い換えは不可能か不自然であるもの。
3. 「他の人」との言い換えは不自然であるが、「人」との言い換えは可能であるもの。
4. 「他の人」との言い換えも、「人」との言い換えも不可能であるもの。

3-1. 「他の人」との言い換えが可能であり、しかも「人」との言い換えが可能なものは、用例も多い。

1. 最近、若い男性の間でヘアスタイルを長髪にし、毛を染め、さらにピアスなどの装飾品を着けている人をよく見かける。……。他人に、極度の嫌悪感を与えるほどの格好はどうかと思うが、ある程度の自由なスタイルに、もう少し大人たちは、寛容にならなくてはいけないと思う。(中国新聞、広場、97.2.19)
2. 学校教育とは大人への準備期間であり、心身が発達するための場を提供してくれるはずのものです。それなのに、現在の日本の教育は、随分違った状況にあり、例えば、他人のことを考えることができる場を提供してくれているのでしょうか。(中国新聞、広場、97.2.13)
3. 「白人と黒人を一緒に撮って違いを強調するのは人種差別だ」という抗議には、「他人が自分と違うのは問題だ、と思っているのではないか。肌の色や生まれた国が違うのは素晴らしいこと。違いは文化を生む根源だ」。(朝日新聞、ひと、97.3.4)
4. そうだ、子供は自分の所有物ではなく、未来の社会からの大切な預

かりもの。今、自分にできることを精いっぱいやろう。他人と比べてみても仕方ない。（朝日新聞，声，97.2.27）

5. 消えていた記憶。小比木潤のことで他人から指摘を受けても自分のことだとは思えないほどに忘れていたはずなのに、その記憶のなくなっていた時間の中では、頭の中にくっきりとあったのだ。（シナプス）
6. 「……。探偵ごっこというのは、結構面白いもんだね。人間には、誰でも、他人の生活をのぞいてみたい欲望があるらしい。……」（かわいい）
7. 七年前までは和子と共通の言葉だった。サインの形は他人には鉛筆のいたずら書きにしか見えなかった。（彩り河，上）
8. 「ぼくは私立探偵じゃありませんよ」  
「わかっている。だからきみに頼むんだ。こんなこと他人に頼めない。いい恥さらしだからな」（新オリ）
9. 「あれだって、他人から貰ったものかもしれないし、考えてみると、決定打じゃないわね。とにかくもっともっと、私達、歩き回る必要があるのよ」（鎌倉）
10. 「……。運転マナーに限らず、今の日本社会の公共意識はひどいからね。他人の気持ちを思いやることができない。行動の善悪を自分で判断することができない。そんな人間が多すぎる。……」（JAF・MATE, 97.8）

**3-2.** 「他の人」との言い換えが可能であるが、しかし「人」との言い換えが不可能か不自然であるもの。

1. 他人から見れば暗く、「青春」とはかけ離れた一年だったと思う。（朝日新聞，声，98.4.14）
2. 以来、私は自分だけの趣味で埋まった空間がかえって苦手になってい

る。むしろ適当に他人の好みが入っていて、それをなんとか工夫し、案配するのがおもしろい。(朝日新聞, 私空間, 97.2.24)

3. 酒場で他人と意気投合して大いに議論してしまったという, そんなことだと思う。(シナプス)
4. 「……, 僕の仕事のために, 他人を巻き込む訳にもいかんでしょう。……」(シナプス)
5. 「もしかすると, 井川さんが探してらっしゃる女性は, ヤス子という他人の名をかたっているのかもしれませんがよ」(彩り河, 下)
6. 「これだけ云えば東洋商事の高柳社長が和子のスポンサーでないことが分かるじゃありませんか。他人なら表面を見てそう思うかもしれないがね。……」(彩り河, 上)

3-3. 「他の人」との言い換えは不自然であるが, 「人」との言い換えは可能であるもの。

1. 銀行員は他人のお金を扱っているので不正があってはならない。(朝日新聞, 声, 97.1.9)
2. 日本人の発想の中には, 他人を不幸にしておいて, その相手の<sup>まっ</sup>霊を祀るという考えがある。(鎌倉)
3. 他を責める人自分はどうか。(朝日新聞, 声, 93.3.28)
4. しかし, 他人の非をあげつらうことにきゅうきゅうとし, 自らのおこないを省みることを忘れてはいないだろうか。(朝日新聞, 声, 93.3.28)
5. 「あなたは, 小説なんてお嫌いなのかしら。他人が空想で作りあげた現実でない物語を楽しむ気にはなれないっていう人も世の中にはいるでしょう。そのタイプですの」(シナプス)
6. 「奴らは, 汚職をするのに他人の金を使っておる。……」(パステル)
7. むろん自分の空間をつくることもできる。他人の空間にいりびたりになることもできる。(朝日新聞, 私空間, 97.2.24)



3-4. 「他の人」との言い換えも、「人」との言い換えも不可能であるもの。

1. 外で親と話すのを恥ずかしがる年になった息子に、学校でばったり会った。用事があったので、仕方なく「〇〇クン」と名字で呼んで、他人をよそおって話をすませた。（朝日新聞，ひとコマド，97.3.9）
2. 何が原因で荒れるのかは分かりませんが、親と他人をちゃんと見分けて、親のみに無理を強いるのも、病んだ子のゆがんだ愛情の表現のように思えてなりません。（朝日新聞，声，97.2.19）
3. その人の、その口調が顔の中の何かを刺激した。完全な他人に対してならば出すはずもないくすぐるような調子が相手の口ぶりにはこもっていたのだ。（シナプス）
4. 「……。そういう田舎のことで、父の郷里でも、父が東京で悪いことをしたという噂から、母は父の親戚の者からさえ白い眼で見られました。他人はなおさらです。……」（彩り河，下）
5. 嫉妬は、対等かそれに近い僅少な距離の場合に生じるが、こうまで絶対的な隔絶になってしまえば、もう他人のように平静でいられる。（彩り河，上）
6. 出産のため里帰りし、正月を東京の実家で迎えた。二年ぶりに生活する実家。二十八年間過ごしていた東京だが、なぜか他人の住む町のような気がしてしまう。（朝日新聞，声，97.1.13）

4. 以上の用例のそれぞれについて以下で分析していこう。

4-1. 3-1. で例示された用例は、「人」とも「他の人」とも言い換えが可能で、これらの用例での「他人」の意味は、1. であげた「(一) ホカノヒト。我レナラヌ人」に相当するのではあるが、よくみると、二種類の用例になっているようだ。例文1～5と例文6～10である。

例文1～5の「他人」は確かに「我レナラヌ人」ではあるが、どちらかと言えば「まわりの人」でもありうる。これらの用例は〔1〕の1-2. であげた用例と共通していて、〔1〕の3-2. (Bグループ) でも述べたように、

「人」とも「他の人」とも言い換えられる。

例文6～10は1.であげた意味で言うと、(一)であると同時に「(三) 見ズシラズノ人。関係ナキ人」でもあると言えよう。この場合は、特定の誰かが念頭にあるわけではないので、[1]の3-3. (Dグループ)で述べたように、「他の人」とも「人」とも言い換えが可能である。

4-2. 3-2.で例示された用例は「人」と言い換えるのが不自然であるか無理だと感じられる用例である。1.であげた意味で言えば、(一)と(三)に当たる用例が多く、どれも「～以外の者」、「ほか」ということが強く主張されている。そのような用例については、[1]の3-3. (Eグループ)でも述べたように、「人」との言い換えは不自然な感じを抱かせる。

例えば、例文1や例文6のように、自分以外の者であること(1)、関係者以外の者であること(6)、それがそれぞれ条件になっているような文では、「人」と言い換えにくいと感じさせる。

しかし、例文2, 4などでは、「人」との言い換えができると思われるし、そのような用例も確かに多く、この判定はむずかしいが、ここでは「他の人」との言い換えが可能である点で分類している。また、「人」との言い換えに関しては、次項との関連が考えられる<sup>10)</sup>。

4-2. 3-3.で例示された用例は、「他の人」との言い換えが不自然であると感じさせるものである。これらの用例は意味としては1.にあげた(一)に該当するものであるが、自他の対立(あるいは対比)、当事者とそれ以外の者との対立(対比)がきわめてはっきりしており、その中間や部分を認め

---

10) 用例のすべてを言い換えできるかできないかで分類できるとするのは、本稿の立場ではない。「他人」を用いたある用例について、「他の人」とも「人」とも言い換えが可能だとすると、「他の人」との言い換えにおいては、「ほか」という点で、「人」との言い換えにおいては、「自他の対比」という点で、その両様に解釈できる用例だとみなす、それが本稿の立場である。

ない表現になっている点が、3-1. および 3-2. の用例と異なるところである。

例えば、3-3. の例文 1 の「他人のお金」を「他の人のお金」と言えば、「他の人」とは誰かと戸惑うことになろうし、例文 3 の「他」を「他の人」にすれば、一体誰に対して「ほか」なのかと言うことになろう。このような当事者とそれ以外とをきっぱりと対比している表現では、「人」は使えても、「他の人」は使いにくいということである。

4-4. 3-4. で例示された用例は、1. にあげた意味としては、(二) の「血縁（チスヂ）無キ人」に相当するが、文字どおりそれに当たるのは、例文 1, 4 である。それ以外はなんらかのかかわりもない、いわば「縁もゆかりもない人」を意味しており、その意味では「人」や「他の人」と言い換えることはできない。

5-1. さて、この節では、「他人」の用例を媒介として、「他の人」「人」の意味の関連を検討してきた。それをまとめれば次のようになる。

3-1. は前節 [1] の 1-2. 3-2. (B グループ), 1-3. 3-3. (D グループ) と共通し、一般的に「他者」として指示する場合である。

3-2. は前節 [1] の 1-3. 3-3. (E グループ) と共通し、「～以外の者」の以外を強調する場合である。

3-3. は、この節で明らかになったことで、自他の対比、当事者とそれ以外の者との対比が際立つ時の用法である。

3-4. もこの節で言及される、「他人」特有のよく知られた用法である。

5-2. 「他人」の用法の分析は「他なるもの」「他者」の表現の仕方に四種類あることを明らかにしている。しかし、その四種類はこの節の 1. で言及・引用した意味による分類とは異なっている。つまり、この四分類は、「他人」で指示されている対象が実際にどのような人物であるかによる分類で

はないのである。実際、1.であげた「(三) 見ズ知ラズノ人。関係ナキ人」というのは、この四種類のどれにもその例が見出だせるのである。そうではなくて、この四分類は、「他者」がどのように捉えられているかによる分類なのである。そうすると「他人」の意味は、1.で言及したのとは違って、次のように語ることができる。

- 〈1〉「他の人」とも「人」とも言い換え可能な、「ホカノ人」。
- 〈2〉「他の人」と言い換え可能な、「以外」「ほか」に力点がある関係の人。
- 〈3〉「人」と言い換えが可能な、自他（当事者とそれ以外の者）に対比されて捉えられた人。
- 〈4〉血縁関係にない人、またそれに類比して捉えられる人。

5-3. ところで、以上の検討から、「人」に言い換えられるものに、二種類あることがわかる。それは、3-1.と3-3.である。そして3-1.に関しては既に前節においても確認されているが、この節では、3-3.の用法が注目される。つまり、自他（当事者とそれ以外）の対比に「他人」とともに「人」が用いられることに注目しておきたい。

### 〔3〕「人」ということばの意味と用法

1. ここで検討するのは、いくつかの辞書でその意味が、「自分以外の人間。他人」あるいは「ホカノヒト。他人」とされている、そのような「人」の用例である。

これまで、「人」ということばの用法を、「他の人」「他人」の用例のうち「人」に言い換え可能か否かという仕方で、検討してきた。その結果、次のような三種類の用法が明らかになった。

まず、〔1〕の1-2.の用例のうち、Aグループについては、「他の人」と「人」が用いられること。また、〔1〕の1-2.の用例のうちのBグループと、

1-3. の用例のうちのDグループについては、「他人」も「他の人」も「人」も用いられ、これは、[2] の 3-1. の用例と共通であること。次に、[2] の 3-3. の用例で、「他人」と「人」が用いられる場合、である。

ところで、これまで「人」に関して検討してきたことは、「他なる者」あるいは「ほか」という捉え方の中で、しかも「人」と捉えられるのは、どのような場合か、ということであった。しかし、この節では、当然のことではあるが、「人」という捉え方の中で、「他人」「他の人」と捉えられるもの、そうではないものを検討することである。

とは言え、ここで扱おうとする「人」はすべて事実上「私以外の者」であるから「他者」をそして「他人」を意味する（上記の辞書はこのような解釈である）と考えがちだが、意味と用法を混同してはならない。

例えば、[1] の 1-1. の用例が示すように、仲間の誰かを仲間の一人として指示する場合は「他の人」を使う。しかし、仲のいい友達といえども「他人」だと言うのであれば、[2] の 3-3. の「自他の対比」において捉えることになるのであり、その場合には、例えば「他人にはわからない」とか「人がなんと言おうと……」という表現になる。あるいは「他人」に「ひと」とルビを振る表記を用いるかもしれない。

前節の 5. でも述べたように、指示される対象が事実上どうかということではなく、その対象がどのように捉えられているかというのが、ことばの用法である。従って、ここでは、「人」と捉える捉え方の意味を考察することが課題である。

## 2. 「人」ということばの用例を次の方法で三分類する。

1. 「他の人」との言い換えは可能であるが、「他人」との言い換えが不可能か不自然であるもの。
2. 「他の人」との言い換えも、「他人」との言い換えも可能なもの。
3. 「他の人」との言い換えも、「他人」との言い換えも不可能なもの。

これまでの検討結果と関連するのは、分類1, 2である。

分類1は、[1]の1-2. (A. Bグループ) にあたるものである。

分類2は、[1]の「他の人」の用例で「他人」とも「人」とも言い換えが可能であったもの (Dグループ) と、[2]の「他人」の用例で「人」との言い換えが可能だったもの ([2]の3-3.) とを含み、その両方が「人」の捉え方のもとでは、混在している。つまり、「人」の捉え方から言えば、「他の人」と「他人」ということばの間には、「他人」の捉え方には見られたような「他の人」に言い換えられないというほどの違い (つまり、[2]の3-2.で見られたような違い) が言えない、ということである。

分類3は、「人」という捉え方特有の用法である。

以下では、それぞれに分類された用例について検討しよう。

3-1. 「他の人」との言い換えは可能だが、「他人」との言い換えは不可能か不自然と感じられる用例。

1. 「そうだったの……。でもね、先生たち、そんなんじゃないの。だから、人に言ったりしないでね」(かわいい)
2. 「その三軒目の店で、ぼくは何かおかしいことをしませんでしたか。偉そうなことを口走ったとか、ひとに喧嘩を売るとか」(シナプス)
3. 「……。なんとかしなさい、人の迷惑を少しは考えたらどうです」(流れる星)
4. 「今しばらくの我慢だよ。おばあちゃんの家へ帰ったら、白いご飯を山のように盛ってあげるからね。人の食べるとこなんか見るのものじゃない」(流れる星)
5. ただ、人に見られるのが悲しかった。(流れる星)
6. 自然に湧き出てくる涙をかみしめて、子持ちだという理由で一カ年人に嫌われ通してきた自分の姿を振り返って見た。(流れる星)

3-2. 「他の人」との言い換えも、「他人」との言い換えも可能な用例。

1. 「不動産屋の真似もするし、小料理屋まで人にやらせているという。……」（青の）
2. 人がなんといおうと、気にしないでください。（夜の）
3. 最重度の傷害があって、……，気管切開しているために声も出せない英明君の体の中に「人の痛みを自分の痛みとして感じる事が出来る仕組み」が働いているのを発見して、私は深く感動しました。（朝日新聞，聞いて！言わせて！，97.3.17）
4. 「あとの家族たちはどうするんだ」  
「だって，こんな場合人のことなんか考えていられないじゃないの」（流れる星）
5. 人間は，自分の意志による制御が失われたと知った時，まず自分の心の中の暗部を思い出す。そこには，ひとに隠しておきたい醜いものがうごめいている。（シナプス）
6. 謎のような第三者を考えだしたりして，罪を人になすりつけようとする事自体，有罪を告白しているようなものだと，彼は思った。（夜の）
7. 「いいじゃない，人のことだもの……」（ふたりで）
8. 他人が稼いだお金で，養われ，暮らすことは望んでいなかった。（雌花）
9. 「真岡さんが悩むことなんかないわ。あの人は，他人に何か言われて動くような人間じゃないもの。幕良に行ったのは，自分で決めたことなのよ……」（パステル）
10. 三十代までは使い走りもできる。人のためにたばこを買いにゆくこともできるし，……（風塵抄）

3-3. 「他の人」との言い換えも、「他人」との言い換えも不可能か不自然であるもの。

1. 香苗は家の周りをぐるっと回ってみた。反対側の小径から厩舎の方へ戻ろうと足を運びかけた時、人の話し声が聞こえた。(パステル)
2. 「まあ、たとえ夫婦だって、ひとのことを何から何まで知りつくしているなんてことはないことだからね」(シナプス)
3. 「……、そしたら光照がちょっと人に会ってくるって、ロッジを出て行ったの。……」(青の)
4. 「たしかです。人が来た時は、すぐこの柱時計を見る癖があるんで、おぼえています」(夜の)
5. 「シンシアはあまり人につき合わない。……」(青の)
6. 「『それではまた改めて人を立てまして』なんて、秘書の奴、まじめくさった切口上で帰って行ったけど——」(雌花)
7. 訓練さえすれば(大変、楽天的な言い方だが)人の話のおもしろさが見えるようになる、ということについての話である。(風塵抄)
8. 私は人に憎悪をもつようなしつこい性格ではないつもりだが、このときのその教師の顔つきをいまでもおぼえている。(風塵抄)
9. 「人をだましてまで、あたし達の幸福を守ろうなんて、あたし、考えられないわ。……」(雌花)

4-1. 3-1.の用例は、[1]の1-2.の用例と共通して、居合わせている状況での発話であったり、取り囲む人々が想定されている文(例文1とか例文5, 6)である。このような用例は、[1]の1-2.の用例がそうであったように「他の人」も「人」も可能である。

例文4は、発話者が居合わす発話者以外の人を「人」で指示している例であり、例文3は、それとは反対に居合わす状況で、発話者が発話相手(聞き手)以外の、発話者自身を含む人たちのことを「人」で指示している。この例文3は、[1]の1-2.の例文2と同じである。

- 1-2-2. 「あんたたち、荷物ひざの上に置きなさい。他の人が座れないじゃ



ないの!!」

居合わす状況では、発話者は、居合わす人々たちについても発話者自身についても、「人」あるいは「他の人」で指示し、「他人」はまず、使われない。

4-2. 3-2. の用例については、先の3. で分類2について述べたように、ここで、「人」と捉えられている例文は、「他人」とも「他の人」とも言い換えられるが、強いていえば、「他人」だというもの（例えば、例文7～10）もある。その時には自他の対比を重視している、ということになる。

例文2と例文7はよく似た表現である。例文2について、この例文は、「周りの人」を意味すると考えれば、「他の人」との言い換えが相応しいし、話相手とそれ以外とを対比した表現と受けとめれば、「他人」での言い換えが相応しいと考えられる。そして、例文2と例文7を比較すれば、例文7の方に、対比する意味合いが多いと言えるのではないか。

「人」と捉える仕方は、3-2. の用例が示すように、そのどちらも容れる捉え方である、とすることができる。

4-3. 3-3. にあげた用例は、「他（た）」とか「他（ほか）」とか「以外」という規定があまり意味をなさない、そのような用例である。そのような規定が必要ない仕方で、対象を指示する用法である。

我々がこのような仕方で語っている「人」は、「他者」ではあるのだが、他者であるよりもまず端的に「人」である。

ところで、これらの例文の用法が、先の3-1. 3-2. の用例と、従ってまた、3. で述べた分類1, 2と全く無関係であるか、と言えば、そうではないであろう。例文1, 2, 5は、居合わす状況での「人」の使用と無関係ではないし、例文4, 5, 7, 9は、自他を対比する用法と無関係だとは考えにくい。

では、分類1, 2のような用法と、この3-3. の用法とはどのような関係

にあると考えられるだろうか。

それを考えるために、この3-3.の用法に連なると考えられる「人與人」という表現を媒介に利用したい。いくつか例をあげよう。

10. 「豊かさが崩壊した直後のピュアな人間の形を神戸で見た。動くことで人と人につながり、協力関係は無償だった。見知らぬ人と握手を交わした瞬間は数知れない。……」(朝日新聞, 家庭, 98.2.20)
11. 人は一人では生きていけない。だから、人と人との協調ということが、大切になってくる。自分のことも大切だが、なによりも人のことを大切にし、どうすれば人の役に立つことができるかを、考えたい。(中国新聞, 広場, 98.3.8)
12. 「……。物を媒介に人と人との心を近付ける役目を果たしている『くるりん』を通じて、心の復興にも貢献できるといいですね」(朝日新聞, 被災地に生きる人々, 98.2.18)

「人與人」という表現は、個人と個人が向き合い、端的に相手を「人」と指すことを意味している。例文11には「自分」とそれと対比された「人」が出てくるが、この文の「人與人」という表現において、一方が自分と対比された自分以外の「人」であれば、他方の「人」は「自分」とも解釈できる。あるいはまた、自分と対比された自分以外の「人」同士であってもかまわない。この表現には、個々人の向き合いがあり、相互に「人」と呼ばれる関係がある、と考えることができる。

そうすると、例文2の「夫婦」にも、「人與人」と言える関係があり、自他ともに「人」と言うことができる、と考えられよう。また、例文3も光照自身の考えにおいては、会いに行く人物との間で、一種「人與人」に類する関係が思い描かれていた、と考えられる。例文6も秘書の頭の中ではこれと同じようなことがあるのではないか。

つまり、他者を「人與人」に類する関係で捉える捉え方があり、そのような仕方で捉えられている「人」は「他人」や「他の人」と言い換えにく

い、と言えよう。

例文7, 8の各文では、特定の他者が考えられているわけではなく、話し手を一方の「人」として「人と人」の関係で向き合う姿勢で語られている、と言えよう。また、例文6については、特定の他者が考えられるのかもしれないが、例文7, 8と同様に、「人と人」の関係で向き合う姿勢で語られている、と言える。ただ、この関係が緩やかであるので、「他人」や「他の人」との言い換えの可能性を感じさせるが、しかし実際に言い換えると、なにか不自然さが出てくる。

5. 他の用例（3-1. 3-2.）との関係は、次のように言えるであろう。

端的に「人と人」に類する関係で捉えられている場合は、「他人」とも「人」とも言い換えにくい（3-3.）。しかしその関係が、居合わす状況で、捉えられている場合には、「他の人」と言い換えられる（3-1.）。

ところで、この「人と人」との関係において、「人」と「人」との間に、「ほか」とか「以外」とか、「対比」とかの意味が入ってくるに従って、「他の人」あるいは「他人」に言い換えられるようになる（3-2.）と、言えるのではないか。

## まとめ

本論では、“自分以外の人”を意味する、「他の人」「他人」「人」という三つのことばについて、「他者」の意味にかかわる、用法について検討してきた。本論がそのために用いた方法は、それ以外の他の二つのことばとの言い換えが可能かどうかという方法である。そして、どのような時に言い換えが可能であり、そうではないかを明らかにすることであった。そのようにして、そのことばで対象を捉える捉え方の特徴を把握しようとしたのである。

その方法は、辞書的な意味に従って、それぞれのことばの用法を分析しようというのではなく、対象の捉え方を、いろいろの用例に基づいて分析

することであった。

具体的な結果としては、「他の人」に関しては、[1]の4-2.のように用法を分類できるし、「他人」に関しては、[2]の5-2.のようにまとめることができる。また、「人」に関しては、[3]の5.のように暫定的に語ることができよう。

さて、このような分析をもとに、どのようなことが言えるか、ということが残されているが、これについては、次回以降の課題としたい。